◆市民部会（市民会議）の実績

テーマ	解決手法	実際の取り組み
全体	・勉強会	・一色干潟などの「海」の現状を知る見学会を行った。（平成23年）。 ・森の健康診断に参加し、「山」の現状を知る見学会を行った（平成23年） ・上流から下流まで「山・川・海」を知る2日間ツアーを開催した。（平成23年） ・国土交通省、愛知県からの情報提供を通し、今後の河川事業を学ぶ会を行った。（平成23年） ・市民有志による市民主導の運営を提案した。（平成23年） ・市民に加え、行政、森林組合、学識者の連携した運営を提案した。（平成24年） ・「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」の3つのテーマを抽出し、それぞれ主務担当者を設け、活動を行うこととなった。（平成26年） ・ワークショップ形式で、流域の上下流の課題、昔と今の変化、流域市民に伝えていきたいことを流域マップに示した。（平成30年）
ごみ・流木	・イベントへの参加	・海部会主導で三河湾におけるごみ調査を行った。（平成25年） ・山部会と協働して、東幡豆のトンボロ干潟周辺のゴミの現状を確認した。（平成27年） ・海ごみ・川ごみの問題について、全国的な活動を実施している一般社団法人JEANおよび全国川ごみネットワークから、ごみ問題に関する最新の知見について、情報共有を行った。（平成28年） ・愛知県が取り組むごみ学習プログラムの内容について情報共有を行った。（平成28年） ・22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会主催の「藤前干潟エクスカーション」に参加し、藤前干潟の清掃活動やごみ焼却場を見学した。（平成29年）
土砂	・勉強会	・国土交通省からの情報提供を通じて土砂管理を学んだ（平成24年） ・川部会主体の勉強会として、小渋ダムの土砂バイパスを視察し、総合土砂管理の知見を深めるとともに、土砂管理検討委員会の進め方について意見交換を行った。（平成27年） ・三河湾の干潟・浅瀬造成に関する行政計画や事業内容、愛知県が実施した海底ごみ・生き物調査の結果を情報共有するとともに、鳥類調査を通じて干潟や背後の土地利用の問題を共有した。（平成26年～平成29年）
木づかい	・イベントへの参加	・木づかいライブ・スギダラキャラバンは、流域内のみならず、名古屋や東京への出展等を通して認知度が拡大している。（平成26年～平成30年） ・流域ものさしを流域共通のアイテムとし、流域の市民に対して周知を進めている。（平成26～平成30年）

【市民部会】

〇できたこと

・設立後しばらくは、市民主導の会議や勉強会が多数実施された。

・流域のイベントに懇談会メンバー（主に市民）が多数参加し、木づかい等の推進に貢献した。

〇もう少しでできたこと

・砂の駅構想、いかだを使った土砂の運搬など、実現可能な提案が多数あがった。

〇できなかったこと

・「ごみ・流木」「土砂」「木づかい」については、地域部会による検討で、市民部会（市民会議）における検討はほとんどできなかった。

◆山部会の実績

課題	テーマ	解決手法	実際の取り組み
● 人と山村の課題	山村再生担い手づくり事例集（流域圏担い手づくり事例集）	・森林の適切な管理は山村再生が重要。先ずは人づくりに取り組む。	・平成25年から平成27年の3カ年に及ぶ事例集の取材先は、64団体となり、取材者と取材先との新たな関係も生まれた。（平成25～平成27年） ・平成25年に訪問した取材先を対象に、再訪問を行った（その後、いかがお過ごしですか？プロジェクト）（平成28年） ・「山村再生担い手づくり事例集」から「流域圏担い手づくり事例集」に名称を変えて、流域全体に対象を広げて取材を行った。（平成29～平成30年） ・取材先と取材者、取材者同士のつながりを目的とした「事例集交流会」を行った。（平成29年～平成30年）
	山村ミーティング	・山村再生を支援する取組みへの参加・情報共有を行う。	・山川海流域フェスティバルの骨子を取りまとめた。中川町きこり祭（北海道）を目標に地域の祭の中で試験的に導入することが話し合われた。（平成27年） ・矢作川最上流端から河口までを自転車で巡る流域キャラバンが提案され、時期（夏休み）や対象者（小学生）といった詳細が検討された。（平成27年） ・矢作川感謝祭を開催し、流域の森林組合（根羽・恵南・豊田・岡崎）が一堂にPRを行った。（平成29年～平成30年） ・矢作川流域林業担い手100人ヒヤリングを実施している。（平成29年～平成30年）
● 森林の課題	森づくりガイドライン	・流域圏として統一性のある森林管理を行うためのガイドラインを作る。	・矢作川流域圏の森づくりや間伐の取組みについて情報収取を行った。（平成24～平成30年） ・額田木の駅プロジェクトが5月15日に発足し、順調に木材の搬出が行われている。根羽、恵那、豊田、岡崎と矢作川流域の4つの自治体で木の駅プロジェクトが稼働している。（平成27年） ・岡崎市では、水循環基本法(H26制定)の制定に先駆けて水循環推進協議会「緑のダム部会」が発足した。これに関連して、矢作川流域圏にモデル地域を設定し、適切な管理（間伐）と流量の関係について、定量的な検証が必要であるとの意見が出た。（平成27年） ・近自然森づくりを実施する、荒山林業を訪問した。（平成27年） ・流域という観点から、同様の課題を抱える神奈川県山北町の森づくりを学んだ。（平成28年） ・森づくりガイドラインの骨子について、情報共有と意見交換を行った。（平成29年） ・山川海の合同部会を設け、矢作川の特徴や課題について、学術的な成果を下に意見交換を行った。（平成30年）
	木づかいガイドライン	・矢作川の森の恵みが中下流・海まで届くガイドラインを作る。	・木材利用の推進について、WGにて「皆を木の世界に誘うためのブレーンストーミング」を実施し、特に青少年期に木の魅力や楽しさに触れることの重要性を認識した。（平成25年） ・ブレーンストーミングの成果を活かし、木づかいガイドラインの「ライフステージアタック表」を作成した。（平成25年） ・同時に、根羽村木づかいガイドラインの骨子として市民目線の感度によって「さあ～しよう」の形で産・官・学・市民の立場から、木づかいガイドラインを作成する方針「矢作川ディズ」を作成した（平成26～平成27年） ・「矢作川ディズ」により、子供から大人に至るまで、様々な人生の場面で木の魅力を楽しんでいただく重要性を再認識し、木のアイテム「どこでもシリーズ」や「動く木のおもちゃ」を根羽村森林組合が中心となって開発し、「今すぐはじめる木のある暮らし」をテーマに「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を矢作川流域内において本格的にスタートさせた。（平成26～平成30年） ・継続的な「木づかいライブ・スギダラキャラバン」の実施を通し、矢作川流域内のみならず、長野県や名古屋や東京からのオファーも増え、それらの出展等を通して、木の魅力や楽しさの認知度が拡大している。（平成26年～平成30年） ・「流域ものさし」を流域共通のアイテムとして製作し、「私の流域物語」と併せた配布により、流域市民に対して、木づかいや身近な郷土樹種についての周知を進めようとしている。（平成26～平成30年）

【山部会】

〇できたこと

・流域圏（山村再生）担い手づくり事例集を平成25年度以降毎年発行することができた。また、事例集交流会を通じて、流域圏内の団体同士の連携が生まれた。（事務局）
・「根羽」「恵那」「豊田」「岡崎」の4つの地域を回りながら、山村再生や森づくり・木づかいに関する現地見学、キーパーソンとの意見交換を行うことができた。（事務局）
・流域林業担い手100人ヒヤリングを実施し、流域の山の担い手の声をとりまとめた。（事務局）
・多くのたくましい担い手の活動に教えられ、山村再生に希望と可能性を見出すことができた。(眞木)
・根羽村森林組合と豊田森林組合のコラボ作品が誕生した。(洲崎)
・完全とは言えないが山・川・海が協力したイベントができるようになった（髙橋）
・山村ミーティングにおいて、矢作川感謝祭の開催といった地域の人々（特に子どもたち）が参加できるようなイベントが行われている。(水谷)
・山川海流域フェスティバルや矢作川感謝祭など、市民の方々が参加できるようなイベントの開催は地域に愛着がもてそうで未来につながるのではないか。(新井)
・中～下流の住民関係者が天下杉の魅力を知った。(洲崎)
・根羽村森林組合が耕Lifeで中流域住民に木の魅力をアピールした。(洲崎)
・串原林業の林道づくりをクリアウォータープロジェクトがサポートした。(洲崎)
・アンティ乙葉さんの染色に奥矢作森林塾活動地のカリヤスが使われる。(洲崎)
・地域の人達の声を聞く。現場を理解することができてきた。(近藤)
・豊田市による水道水源モニタリングが行われた。(蔵治)
・木の駅プロジェクトの流域圏全体への展開（蔵治）
・間伐面積の情報収集、見える化（蔵治）
・月瀬の大杉の評価・低コスト林業・雪害（城田）
・担い手づくり事例集を通して流域圏内の団体の理解が深まり親しくなった。結果、矢作川流域に生活している誇りが生まれた。(沖)
・山と海については山の各森林組合、海の漁業組合の間で問題意識の統一ができている。(髙橋)

〇もう少しでできたこと

・山の担い手100人ヒヤリングの結果のとりまとめ（事務局）
・実際の地域再生のエネルギーに果たして、結集したであろうか（私の怠慢)。(眞木)
・他の部会分野を理解しようとする心（近藤）
・「担い手」として、日常的かつ地味な存在であるが、地域再生に通底するエネルギーとしての存在を見逃しがちだった。(眞木)
・源流域生態系の広域評価（城田）
・流域のモノサシの違い（近藤）
・矢作川流域の人材育成システム（近藤）

〇できなかったこと

・矢作川流域最上流部の「平谷村」の不参加（事務局）
・現時点で具体的に海・川・山が経済的なつながりを持つまでには至っていない（髙橋）
・流域内に暮らす住民への懇談会からのフィードバック（眞木）
・自治体（市町村）及び県の関係セクションの前向きな参画（眞木）
・河川整備計画との関係づけ（蔵治）　・林業労働者の支援の具体的方策の検討（蔵治）　・川海とのコミュニケーション。出発点の共有。(蔵治)　・「土砂を流す森」モデル林の設定。(蔵治)
・森づくり行政担当者の連携（蔵治）　・自然生態系と人間管理生態系の最適配置についての検討（蔵治）　・河川整備計画と森づくりの関係の検討（蔵治）
・市、村、県の参加、国の他省庁の参加（蔵治）

〇その他

・全体のテーマについての課題解決として、「山里クリエイティブコモンズ」を実現することを提案する。(筒井)
・具体的に大量の木材の活用法を提案します。里山の活性化をターゲットとします。サステナビリティーも含む。(筒井)
・矢作川流域圏が全国のモデルとなることを目指したい。「木の駅」モデルもその一つ。一層の活性化を目指す。(不明)